

「女性の強みが組織を変える、地域を変える」



18歳で働き始め、 トップセールスへ

高卒で働き始めた当時、22~23歳が女性の結婚適齢期で、仕事の辞め時とされていた。女性と男性の仕事には完全に線が引かれ、女性は男性のアシスタントだった。私も男性と同じように責任ある仕事がしたいと転職する中、車のセールスという仕事に出会った。

ある日、我が家にいらした少しのんびりした印象のセールスマンがトップセールスだと聞き、私にも出来るはずと応募した。最初は「女性には無理」と断られたが、懇願し採用された。初めて営業用のカバンと名刺をもらった時は、ビジネスパーソンとして認めてもらえた気がして、夢のように嬉しかった。1日100件訪問を目標に、飛び込み訪問しても女性では話も聞いてもらえない。そんなある日、訪問先の若い主婦が「あなたが営業マン?かっこいい!」と共感してくれたことが嬉しくて今でも忘れられない。その後、その方にお客様を紹介していただき、車が売れた時は興奮のあまり帰り道が分からなくなるほどだった。

営業とは、人との出会い。車を売ろうとせず、一期一会を楽しむことが大切。今は「おもてなし」という言葉を頻繁に使うが、自動車業界でその言葉を初めて使ったのは私だと思う。ショールームでも、私はまず「今日は、会社はお休みですか?」「お忙しい中、お越しいただきありがとうございます」と、お客様へのお声かけから始めた。その方に関心を持ちライフスタイルが分かれば、どういう車が必要なのかお勧める甲斐がある。そして、最後は褒める。褒められて嫌な人はいない。その方の良い所を見つけ関係を大切にすることで、営業成績も上がり、大きな自信になった。

女性の強みは「共感力」

女性は、素直に相手に寄り添う言葉をかけることができる。このやさしさは共感力と包容力、おもてなしの心であり、営業に向いている。女性初の支店長に就任した時には、男性社員は「バリア」をはって、近寄ってこなかった。ここで身につけたのが、ホウ・レン・ソウ(報告・連絡・相談)は上司がするものだという。いつも感謝の気持ちで向き合い「あなたは部下として大切な存在である」ということを伝える。叱る時は厳しく叱ったが、絶対引きずらない。とにかく、まっすぐ真剣に向き合うこと。また管理職は、

はやし ふみこ
【講師】 林 文子さん
(横浜市長)

いつも強く、タフでなければということはない。むしろ弱い所を率直に見せる方が有効。営業成績の悪い社員は、自分に自信がなく、自分の力がわからない。だから褒めてあげる。いくら上司が頑張って業績を引き上げようとしても、本人がその気にならないと伸びない。職場は人の心が集まって仕事をしている場であり、少しでもトップがネガティブな気持ちを持つと、たちまち業績は落ちる。

男女共同参画社会の実現へ

私は、男性中心の組織に女性が参画することで大きな成果があがることを、身を持って証明してきた。女性と男性の数が半々になれば、政治や行政の世界ももっと変わる。対立点を見出して批判し合うのではなく、合意点を探りながら、女性と男性がお互い強みを出し合って弱みを補完すれば、いいビジネス、政治ができるだろう。

日本のトップマネジメントは男性中心で、世界的にみても先進国ではありえない。国も「なでしこ大作戦」と銘打ち、女性の社会参画を具体的に推し進めようとしている。女性の「共感力」をもっと活かせれば市政が変わる。おもてなしはお金をかけないで、心でできる。経営者時代と同様、行政の場でもいつも人と向き合い、仕事を進めていきたい。女性達をもっと幸せにしたいし、社会で活躍してもらいたい。女性と男性が共存することで、素晴らしい社会が実現できる。

林 文子さんプロフィール (横浜市長)
東京都生まれ。BMW東京(株)代表取締役社長、(株)ダイエー代表取締役会長兼CEO、日産自動車(株)執行役員、東京日産自動車販売(株)代表取締役社長等を歴任し、2009年8月より現職。ハーバードビジネススクール女性経営者賞(06年)、米フォーチュン誌「世界ビジネス界で最強の女性50人」選出(08年)など、受賞歴多数。



リプロダクティブ・ヘルス/ライツ



一般社団法人日本家族計画協会 きたむら くに
家族計画研究センター所長 北村 邦夫

自治医科大学医学部卒。1988年から日本家族計画協会クリニック所長。現在、厚生科学審議会臨時委員、日本思春期学会副理事長などを務める。著書には「セックス嫌いな若者たち」(メディアファクトリー新書)など多数。現在、読売新聞社のサイト・ヨミドクターで「Dr北村の「性」の診察室」連載中。

妊娠・出産には限界があることを知らせよう

「結婚には適齢期はないけれど、妊娠・出産には限界がある」。最近、僕のクリニックで受診している女性に頻繁に向けられる言葉です。今の仕事に就いてから早24年。当初は思春期外来を標榜し、中高校生が大勢集まるクリニックだったのに、その頃の患者がみんなオトナになって…。しかも、女性が取り組める確実な避妊法の代表格である低用量経口避妊薬(ピル)を手にした彼らは、月経困難症の改善や周期調節が自在にできる魅力に取り憑かれたのか、一向に服用を止めようとしないうちに業を煮やした僕からの発言です。非婚を決めたわけではないのに、結婚に対しては必ずしも積極的ではなく、近くで見ていると、カルテが分厚くなっていき、その分、年齢もかさんでいくことに一抹の不安を禁じ得ません。「だって、結婚すれば子どもなんて産めるのでしょう」とこともなげにおっしゃる姿が気になっています。

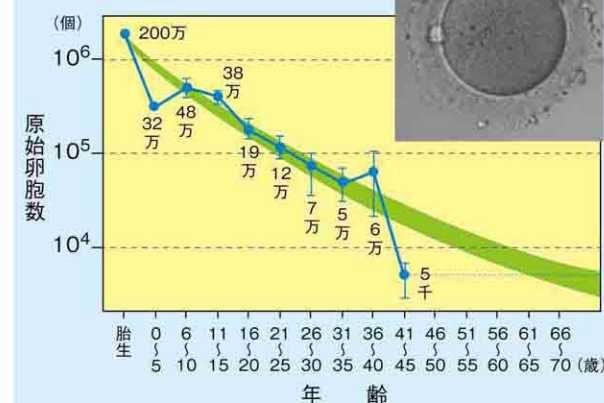
以前、misonoのお姉さんである歌姫倅田来未の一言が日本列島を駆け巡ったことがあります。「羊水が腐る」などというのは科学的にみても事実無根ではあるし、諸般の事情から高齢出産を余儀なくされている女性たちにとっては許し難い言葉として受け止められても致し方ないことなのかも知れません。彼女がどのような経緯でこの失言に至ったのかは知る由もありませんが、学ぶチャンスを与えられていない、わが国の教育事情があるように思えてなりません。

少子高齢化、晩婚化など未だ日本人が経験したことのない時代を生きる我々にとって必要不可欠な知識くらいは折に触れて教え、学ぶことが大切ではないでしょうか。例えば、現代人の選択の結果として高齢出産が増えていることは承知していますが、高齢出産に伴うリスクについては意外にも知られていません。むしろ、医学が進歩したので、産みたければいつでも産めるなどと出産を安易に捉える風潮さえあります。卵子提供、代理母などの話題に事欠かないこともそれに拍車をかけています。それこそ誤解です。

卵子は受精に不可欠ですが、胎生期に200万個近くあった原始卵胞(卵子のもと)は時間の経過とともに減少

し、思春期には40万個、40歳を超える頃には5000個を割るなど、顕著に減少していくことを知る人は意外と少ないものです。言い換えれば卵子は日々老化?しその数を減らしていくのです。だから、40歳を超えたとすると妊娠はとて難しく、仮に妊娠・出産に至ることがあっても染色体異常などが起こりやすくなります。生活習慣病とも言われる糖尿病、高血圧、高脂血症なども妊娠合併症としては看過できません。その結果として、胎児仮死兆候のひとつとして羊水混濁などを認めることがあります。素人とはいえ、この混濁を「腐る」という表現に置き換えてしまったのでしょうか。超有名人である彼女が公共のメディアでの不用意な発言が醸し出した事件ですが、私たちに当たり前になりつつある高齢出産の問題について考えるきっかけとなりました。

加齢による卵巣における
原始卵胞数の減少



Block, E.:Acta.Anat.(Basel)14, 108(1952)より改変

<最後に>

3回にわたってリプロダクティブ・ヘルス(RH)講座を担当させていただきました。RHを3回で完結することは容易ではありませんが、RHとは「男女を問わず良好な人間関係の中で、エイズや性感染症の恐れなしに性的関係を営むことができ、産みたいときには産めるように、産めないのであれば確実な避妊を行うことができる」と要約できます。皆さんも日頃意識されないまでもRHに関連したお仕事をされていることが少なくないでしょう。この講座がそんなことを考える一助になれば幸いです。